

## 第8回 小豆島町総合教育会議

### 【日時・場所】

- 開催日時 平成28年2月26日（金） 午後3時～
- 開催場所 イマージュセンター2階 多目的ホール
- 出席者 塩田町長、後藤教育長、平田オリザ氏  
熊坂委員、岡田委員、岡本委員  
松本小豆島高等学校教頭、小玉小豆島中学校校長、片山池田小学校校長  
羽座星城小学校校長、三浦安田小学校校長、松岡苗羽小学校教頭  
慈氏草壁保育園園長
- 同席者 【町職員】  
空林総務部長、坂東教育部長、松田社会教育課長  
後藤子育ち共育課長、高橋教育指導室長  
【教育関係者】  
安藤園長（星城・安田・苗羽幼稚園）  
川口園長（旭・福田幼稚園、内海保育所橘・福田分園）  
中多小豆島こどもセンター園長、増田小豆島こどもセンター所長  
大岡内海保育所所長
- 傍聴者 11名
- 事務局 3名

### 【内 容】

[塩田町長] 挨拶

第8回小豆島町総合教育会議を開きます。今日は平田オリザさんにお越しいただき、コミュニケーション教育についての講話をしていただく。この後17時半からサン・オリブで劇があるので、もしお時間があれば足をお運びいただきたいと思います。コミュニケーション教育についてお話しいただいた後に、意見交換をしていただく。

[平田オリザ氏] 挨拶

お手元にお配りしたのは、四国学院大学が今年度から指定校推薦について新しい大学入試を取り入れた実施問題である。お聞きになった方も多と思うが、文科省の方針としては2020年には今のセンター試験を廃止することになっている。新しい入試試験では、一次試験は簡単な基礎学力を問う問題である。今のセンター試験のような一点刻みの点数ではなく、おそらくAランクBランクといったような、英検のような資格に近い形をとると思われるが、その資格を持って大学を受けられるか決める。そして二次試験は潜在的な学習能力を問う問題というのが文科省の方針である。潜在的な学習能力というのは、大学に入ってからどれだけ伸びるかを測る試験であり、非常に高いハードルを大学側としては課

せられている。その中でも思考力や論理性というのは今までも問われてきたが、それ以外に新しく言われているのが「主体性・多様性・協働性」である。特に協働性を問うような試験はまだ各大学とも困惑しており、新聞紙上や週刊誌では東京大学や京都大学の新しいA0入試問題を発表してはいるが、いずれもまだ協働性を問うような試験は行っていない。

四国学院大学ではこれを全国に先駆けて行おうということで、グループワークを試験に導入した。試験内容は、試験会場に行くと7人1組のグループが発表される。私たち教員からのアイスブレイクのワークショップを受けた後、本試験会場にそのグループで移動し、そこで問題文が渡されるものである。例として問題1を見ていただく。

### ●2016年度推薦入学総合選考I(指定校制A)問題①

以下の題材で、ディスカッションドラマ(討論劇)を創りなさい。

2030年、日本の財政状況はさらに悪化し、ついに債務不履行(デフォルト)を宣言する直前まで進みました。日本国政府は国際通貨基金(IMF)からの支援を受け入れることとなり、その条件として厳しい財政健全化策をとることとなります。

国際通貨基金からの要望の一つに多大な維持費がかかる本四架橋のうち二本を廃止し、一本だけを残すという提案がありました。

関係各県を代表して、どの橋を残すかを議論するディスカッションドラマを創りなさい。登場する県は、香川県、徳島県、愛媛県、兵庫県、岡山県、広島県になります。

(六人の班の場合は、県を一つ減らしてください)

他に議長役を一人登場させてください。

各県の代表は自分の県に関係する橋を残すための意見を主張すると共に、他の県、他の橋についての的確な攻撃を加えてください。

その攻撃に対して、反論も考えてください。

まだ議論の最中に、妥協案を提案する県などがあってもかまいません。

最後に結論を出す必要はありません。

誰が、どのタイミングで発言すると面白くなるかをよく考えて、発言の順番を決めてください。

発表の時間は、8分から15分としてください。

発表の際には、部屋にある画用紙を使って名札を作り、各県の名前を書いてください。

この問題について60分間でディスカッションドラマを創り、そのあとに発表まで行っていただく。その中では各県の主張、反論、さらには妥協案を提示する必要がある。しかもこれはただ単にディスカッションすればいいというわけではなく、ドラマとして面白くしろというのが一つの課題であるから、反論されたり逆転があったりしなければ駄目である。またこの会場には各部屋にパソコンが2台置いてあり、必要な情報は検索してもかまわない。私がよく先生方に説明しているのは、今時鎌倉幕府が何年に開設されたか日常生活で覚えている人はいない。知りたいときには、当然スマホで検索されるだろう。要するに検索する能力、つまり何を検索するか、どういう手順で検索するか、という方が大事である。しかもこの部屋にはパソコンが2台しか置いていないので、7人の内誰が検索するか、その情報をどう使うか、そういったことを各部屋に3人の教員がついて評価していく

ことになる。どんな発言をするか、ちゃんと人の意見に耳を傾けられるか、作品作りに向けてタイムキープができていないか、地道な作業を厭わないかなど、評価基準が細かく定められており、各評価基準に4段階で評価をつけ総合点で評価している。

これが終わると、一人一人が面接・インタビューをされる。ここでは自分がどう考えたか、他人の意見についてどう思ったか、そこに参加できたか、ということを見て行くものである。四国学院大学の教員には、「私は演劇はやったことがないので評価できない」という心配があったが、やり終わった後、「確かにこの方が生徒一人一人の潜在的な学習能力を見ることができた」との意見があった。

今のAO入試・推薦入試で多くの私立大学が行っているパターンは、大体小論文を書かせて面接をするものである。大学側からすると面接はみんな同じ答えしかしないため、評価が分からないものになっている。それに少しでも揺さぶりをかけようとするすると圧迫面接と言われ、大学側の責任が問われてしまうという時代である。ところがこの試験であると、この問題に対してどう考えたか、どう取り組んだか、非常に多様な意見が出てくる。例えば、「この生徒はずっと黙っていたけど、意外にじっくり考えていたのだな」とか「この生徒は色々喋っていたけど、上滑りだな」ということが分かってくる。少子化で大学全入時代であるので、生徒を選ぶ試験から、生徒の特性を見極める試験に変えていこうというのが、この入試改革の意図である。

この試験で行ったグループワークの結果、インタビューの結果、生徒の性格を含めたものは、全てカルテにされる。四国学院大学は各クラス20名の少人数教育なので、このカルテをまず大学入学前の指導に、入学後はクラス担任に渡され1年間の指導に活かしていく。2年目からはアカデミックアドバイザー、3年目以降はゼミの担当の先生に渡っていく、生徒一人一人が大学に入学してからどれだけ成長したということを見られるような教育に活かされている。その出発点としてこの新しい入試を位置付けていこうというのが、この大学入試改革の本質である。

2020年時、文科省の予想では全部の大学の改革は無理であると考えられている。例えば日本大学や近畿大学といった人数の多い超マンモス校では、全ての試験を変えるのは難しい。しかし文科省の試算では、約6割から7割の大学は少なくともある一定の推薦入試に変えていくだろうと考えられている。特に国公立はこういった推薦入試が導入されると思われ、受験者数で言っても半分近くが推薦入試を受けると考えられている。そうすると、今の中学一年生からは完全にこの試験に変更となり、今の小学生は全員この試験を受験することになる。さらに今は文科省が予想していたよりも速いテンポで、前倒し実施が始まってきているようである。私の母校である東京の国際基督教大学でも、昨年からは大学の授業を受けてノートをまとめて、その後に設問が出るという、聞いてまとめる力を問う試験を行っている。

私はもともと大阪大学の大学院の教諭として奨学金選抜をしており、実験的にホテルで2泊3日、40人の生徒を缶詰にして演劇・映画を創るという試験をやってきた。また、その中で諸外国の試験を調べてきたが、出題者に共通しているのが、受験の対策をできない問題を毎年考えるのが難しいということであった。要するに進路指導ができなくなっているのである。今までは、香川大学に入るなら英単語3000個覚えておけ、広島大学なら4000個、大阪大学・京都大学なら5000個だと言われ、それを聞いて努力して覚え、模擬試験でA判定、B判定という結果が出て指導していく、というような進路指導をしてきた

と思う。

しかし実際には、8人一組でレゴを使って巨大な戦車を作れ、というような試験が数年前にあった。レゴで巨大な戦車を作るのにA判定もB判定もなく、分かるわけがない。つまり何を見ているのかというと、最近の言葉でいうところの地頭、自分で考える能力、人の意見がちゃんと聞けるか、調整が利くか、そういったことが問われているのである。これは1、2年の受験勉強では受験準備ができないものである。だからこそ小学生のころから少しずつ、国語科だけでなく全教科でアクティブラーニングを取り入れることが必要である。ただ暗記するのではなく、得た知識をどう活かすか、協働作業でどう結論を出していくか、誰に伝えたいのか、例えば小豆島のことを、何も知らない外国人に伝えたいのか、香川県の他の市町村の人に伝えたいのか、そういったことを意識して授業を行っていくことが大事である。

小豆島の子どもたちは、のびのびとしてとてもいい子たちではあるが、こうした試験は苦手ではないだろうか。試験会場でいきなり全然知らない人たちと、これをやらなければならない。島の子どもたちはずっと知り合いの中で育ってきたので、ここを教育で補っておかないと、今までの学力だけを問う試験では勝負できても、これからは厳しい時代になってくる。そうすると離島や山間地の自治体ほど、コミュニケーション教育や主体性・協働性に重きを置いたアクティブラーニングを、小学生の内から少しずつ行っていかなければならなくなってくる。教員の方たちも少しずつそれを意識していただきたい。

繰り返すが全部これにしろと言っているわけではなく、それを意識しながらやっていく技術やノウハウが必要になって来るのではないか。ただ現状としては地方では情報が行きわたっておらず、マスコミは一次試験の制度改革のことばかりを話題にしている、本丸の二次試験にいていないため、イメージが掴みにくいと思う。また地方に行くと、高校の先生で進路指導を生きがいにしてきたような先生ほど変わりたくないという。しかし子どもの成長を考えれば、どう考えてもこういった入試の方向に変えていかざるを得ない。

それは今までのように日本が工業立国の時代であれば、「ネジを90度曲げなさい」と言われれば、90度素直に曲げられる能力を身に付けさせてあげればよかった。ただそういった従順で根性のある産業戦士は、中国や東南アジアにあと10億人くらいいる。

こういう試験と今までの学力試験の何が違うかというと、今までの試験は短期的な記憶を問うてきたが、こちらは長期的な積み重ねによる記憶の組み合わせを問うような試験である。短期的な記憶を問うような試験というのはどのようなものかというと、これからの時代でいうところの学力ではなく、従順さと根性を問うてきた試験である。教員から範囲を提示され、それを一定時間内にたくさん覚えた人の勝ち、これが今までの日本の試験である。しかし従順で根性があるだけではこれからは就職できない時代である。そうすると「ネジを90度曲げなさい」と言われて、曲げる能力、つまり基礎学力は必要であるが、それ以外に「60度曲げてみよう」という発想や勇気、「120度曲げてみました。なぜならば…」と説明できる説明能力やコミュニケーション能力がより必要となってくる。

大学入試改革は表面的なことであって、本来はこれから国際社会を生き抜いていく子どもたちにどんな能力が必要であるかを考えたときに、どうしてもこういった入試に改革をしていかざるをえない、ということである。そのためにも少しずつ学校の授業にアクティブラーニングを取り入れる必要があるのではないだろうか。

[松本小豆島高等学校教頭] 挨拶

アクティブラーニングは本校でも取り組んでいこうということで、様々な施策を行ったり、教育センターの決起集会に参加して情報を得るといような方法をとっている。しかし現場の中にはまだまだ戸惑いがある。

最大の問題が、なぜ知識ではいけないのか、短期的な記憶を問うことはなぜいけないのかということであると考えます。授業をしていて、生徒たちの力を一番平等で同じように測れるのが、記憶力であると感じているからである。真面目な子どもたちと、やんちゃな子ども達と分けると、おそらくやんちゃで元気な子どもたちの方がアクティブラーニングに向いていると考えられる。逆におとなしくて真面目で、今までは良かったとされていた子どもたちが、こうした方法に戸惑うのではないかと考えている。それを評価すると、今までのやんちゃな子どもたちが良い成績になって、一生懸命真面目に取り組む子どもたちが報われない可能性があるのではないかと。もちろん知識を問う問題も必要とおっしゃっているのは分かってはいるが、現状を見るとそちらの方が強調されているように感じ、私たちも生徒もこれでいいのかなと考えている。

二つ目がアクティブラーニングの評価についてである。どういった形でこれを評価していくということについて、評価の基準がはっきりと私たちの方も理解できておらず、何を持って良しとするのか、というところが難しいのではないかと考える。

三つ目がアクティブラーニングのやり方そのものについてである。口先だけで状況に反応する子どもと、逆に物事をじっくり深く考えて反応する子どもがいる。60分で結論を出せと言われても無理ではあるが、2日3日考えると素晴らしい結果を出せるという可能性も多分にあると思われる。そういった子どもたちはアクティブラーニングの中でどうやって拾っていくか、というところが私たちの大きな問題であると考えます。

[平田オリザ氏]

先生方に厳しいことを言わせてもらおうと、今までの日本の学校教育は教えやすいように教え、評価しやすいように評価していた。子どものために学びやすいように教えていたわけではない。これからは学びやすいように教えていただきたい。今おっしゃられていたのは、教育の都合であり、生徒の都合ではない、ということである。

もちろんフォローは必要であるが、60分という制限時間は大事である。小学校の内から60分で回答を作りなさい、と言われればそのためにどのくらい話し合うのかということ計算できる子どもを作っておいていただきたい。とことん話し合っただけで物事が解決すると思っているのは、村社会の論理である。とことん話し合ってもイスラム教徒をキリスト教徒に改宗させることができない。だからイスラム教徒とキリスト教徒がどうにかしてうまくやる方法を60分で考えなければならない。それが合意形成論である。この設問を60分できちんと話し合える能力を学生に要求しますよ、といった、各大学がミッションステートメントとして要求する最低限のコミュニケーション能力というのが新しい学力である。

これを小学生の頃から身に付けていただきたい。この最低限のコミュニケーション能力以外にも、じっくりと考える能力ということが別にあるが、これは確かに測ることができない。しかしある設問に対して、制限時間内に話し合える能力というのは、小学校からちゃんとやっていけば、ある程度学力がある子どもには身に付くものである。今なにもやっ

ていないから差が大きいだけで、これは技術であり、ちゃんと身に付くし、ちゃんと教えられるものである。

フィンランドの教育法が一時期フィンランドメソッドといって流行ったが、フィンランドでは、小学校2年生3年生から20分30分刻みで劇を作ったりディスカッションで結論を出させたりという、短いスパンできちんとまず結論を出していく習慣を身に付けさせていく。これを「対話の体力」と呼んでいるが、だらだら話し合わないということが、これからは大切になっていく。会社の会議で意見を言わなくて、「いや、あいつは意外にじっくり考えるタイプだから」とは実社会ではならない。60分しか会議がなくてそこで何も言わなければ、少なくとも欧米では無能扱いされ、国際社会で生きていくうえで「日本人ですからじっくり考えるタイプです」では通用しない。だからある程度は技術として身に付けていってもらいたい、というのが今日の話の趣旨である。

評価については非常に難しい問題ではある。今の評価が公平と思うのは、慣れているだけ、見えているだけで、150年かけてあの制度を築いてきて扱われていただけであって、そこは意識改革をしていかなければならない。最初の内は当然混乱が起き、今の生徒がその混乱の中に入っていくというのは大変なことだとは思いますが、だから反対というわけにはいかない。文科省が方針を決めたのだから、小豆島の子どもたちをどうやって堪えさせるかということ、現実的に考えていかなければならない。

[小玉小豆島中学校校長] 挨拶

平田先生には昨年、演劇のワークショップを拝見させていただいた。子どもたちが自由にのびのびと自分たちの意見を言い、クラスでは大人しい子もその中で何らかの役割を持って参加しているという姿を見て、これがアクティブラーニングにつながっていくのかということを感じた。しかし先生全員にそれが浸透してはならず、ルールを明確にする必要があると感じている。人か話をしているときはしっかり聞く、時間を守る、全員が何かの役割を持つ、アドリブなどある程度の余裕、本人の自由の部分を設定していくということ。では普通の授業の中で、それをどうやって取り入れていくべきか。今の学校の授業では先生が一方的に喋り、生徒はそれを黙って聞いている。その中にはノートをとるのがやっとなという生徒もいるので、そういった生徒も授業に参加して、何か興味を持って自分の意見を言えるようなところから始めていかなければならないのではないかと。

学校の現場ではアクティブラーニングというところまでいけていないが、2人、6人と少しずつでも話し合いをするなどの活動を取り入れてはいる。今後はさらにコミュニケーションの場を持たす必要があると感じている。

[片山池田小学校校長] 挨拶

平田先生がおっしゃったように、全ての授業でアクティブラーニングをするわけではないと意識しながら授業を進めていかなければならない。本校でも3学期からアクティブラーニングに視点を当てた授業を取り入れている。しかし基礎知識を身に付けるような授業も当然必要であり、アクティブラーニングの授業とどう使い分けていくべきかということが重要になってくる。

先日筑波大学附属小学校の研修に参加したが、子どもたちがよく喋っており、自分の考えを言いたいという意識が強いように感じられた。なぜだろうとよく見ていると、知的好

奇心がとても高いと感じられた。本校の子どもたちを見ていると、与えられたことはするけど、自分から考えていこう、自分からしていこうという意識が弱いかなと感じる。知的好奇心を高めていくためにはどうすればよいか、自分から学んでいく主体性を身に付けさせるにはどうすればいいか、ということが本校にとっての大きな課題であるかと思う。そのためには演劇も一つの手法であるだろうし、どういう問題を子供たちの前に持っていくことで、主体性を身に付けられる、好奇心を高めていけるのだろうか、ということを考えていかなければならないなと感じている。

[平田オリザ氏]

特に筑波大学附属小学校はアクティブラーニングが進んでいる学校の一つである。コミュニケーション教育について十数年関わってきた私たちが一番心配しているのは、こうした大学入試改革が進むにつれ、東京の中高一貫校の子だけしか、東京大学、京都大学に行けなくなってしまうのではないか、ということである。教頭先生が心配していたように、お喋りな子どもの方が有利なのは確かである。しかし「島で育ったからお喋りな東京の子に負けてしまってかわいそう」と慰めていてもしょうがないため、そこに対応する必要がある。

私は個人的に新しい入試試験に疑問も残るため、四国学院大学ではインタビューという形でフォローをしている。こうしたようにフォローをする大学も中には出てくるため、細かく進路指導をすれば、高校の段階では、この大学ならおとなしい子どもも見てくれるだろう、といったような進路指導もできるようになってくるのではないかと思われる。

この入試はお喋りな子どもが有利であると言える。しかし欧米では間違ってもいいから喋りなさいという教育を小学校からされていて、喋らなければ無能扱いである。ある程度は覚悟を決めて取り組まなければならない。

[羽座星城小学校校長] 挨拶

これからの学校教育の方向性は先ほど示していただいた通り、大変よくわかったが難しいと感じる。本校では授業の中で話し合いをすることを重要視している。この方向性は正しいかと思うが、なかなか授業改革には至っていない。四国学院大学の指定校推薦の話では、評価をする側の目というのが大変であると感じた。今後小学校、中学校、高校とみんながコミュニケーション教育に取り組むことで、ほとんどの生徒ができるようになった時、入試試験としてはどのように生徒を選んでいくのだろうか。

[平田オリザ氏]

全員ができるようになったらということだが、そうなれば当然レベルが上がってくるし、こうした授業を受けていることが前提となった時に、また入試改革が起こるものと考えられる。四国学院大学の入試試験はモデルケースであり、先行実施のため弱くなっているが、本来は基礎学力の一次試験があって、その後にこの二次試験があるというのがこの入試の健全な形である。であるから今後はそういった試験の配分を考えたり、より負荷がかかるようなものになってくるかと思う。

また今回の入試改革での大きなポイントの一つとして、生徒の日頃の地域活動を評価するということがある。現在日本ではAO入試でしかやっていないが、そこで評価するのは

せいぜいボランティア活動をどれくらいやっているか、ということくらいである。しかし欧米の一流校では、地域の文化活動とか地域の劇団に入っているとか地域のオーケストラに入っているとかあるいはスポーツとか、そういったものから、生徒の特質を見ている。3本柱である、基礎学力、コミュニケーション能力・協働性、地域などのつながり、そういったものを総合的に見て評価している。

今後、大学入試でふるいに落とすというより、大学そのものの学びが問題になってくるので、評価というものが今までより比重が下がって来ると考える。生徒を選ぶ大学は限られ、ほとんどの大学は欧米のように生徒の特質を見るような試験に変わっていくかと思う。

[三浦安田小学校校長] 挨拶

先生のコミュニケーション教育の話聞いて、わくわく感を感じた。本校ではキャリア教育の視点に立った教育をやっている。その中で困っているのが、自尊意識と自己肯定感がなかなか高まらないことである。そこで今こうしたアクティブなコミュニケーションというのは小学校の段階から取り入れていくべきだと感じたし、それが将来生き抜く力になっていくのではないだろうか。全く先が読めない、不透明な時代になっているので、当然子どもにはそれを生き抜く力を付けていってもらいたいというのが我々の役割の一つではないかと思うが、どう思われるか。

[平田オリザ氏]

全くおっしゃるとおりであると思う。今まで特に高度経済成長時代までは、ある学力やある技術を生徒に付けてあげれば、大体それで一生生きていけた。どれだけコミュニケーション教育を頑張ってもクラスには口下手な子や大人しい子がいる。その子たちはかつて、手に職を付ければ一生生きていけた。20年ほど前までは無口な職人というのは、良いイメージであった。いつから無口だと就職できなくなったのだろうか。かわいそうだとは思いますが、ここには2つの要素がある。

一つは以前の製造業の社会が完全な男性社会であったこと。今はどの製造業でも女性もいれば外国からの労働者もいる。そこでの無口な職人は怖い存在である。無口な職人を社会的弱者とみるならば、その人たちにもお茶を入れてもらったらありがたいと言えるような最低限のコミュニケーション能力は付けていってあげないといけない。

もう一つは産業構造の転換がものすごく速くなってきていること。今までのような終身雇用は難しいだろうと思われ、そうすると若いうちに身に付けた技術や技能だけでは、一生生きていける人間の方がまれになってしまう。つまり、途中で変わらなければならない。柔軟性や主体性といった変われる力を身に付けてあげることの方が、これを覚えておけば一生大丈夫だぞというよりも、大事な能力になって来るとは思いませんか。これは今までの教育ではやってこなかった部分である。

例えばデンマークでは、失業すると4年間は失業保険が出て、前職の給料の9割が支給される。延長すれば最長6年間ももらえる。産業構造の転換のサイクルが速くなっているため、前の職業から次の職業まで急に人間は変わらない。特に製造業の方が失業すると、一番困るのはコミュニケーション能力であると言われている。自己アピールができないと言われている。私たちより上の世代の男性は、子どもの頃男親から自慢話をすると言われて育てられてきて、40、50歳になっていきなり自己アピールできないと就職できない、



と言われてもかわいそうな話である。

デンマークの就労支援では失業すると、最初の半年間はボランティアをやったり、ファーストフードの店にインターンに行ったり農作業体験を行ったり、あるいは演劇のワークショップを受けたりダンスをやったりと、人を楽しませたりすることの喜びみたいなものを、まずは感じさせる。要するに気持ちから変えていかないと、再就職というのはできない。

製造業の方が失業したら、「今時パソコンでも覚えたら、あるいは介護の資格を取ったら再就職できるだろう」というのは経済学者が頭で考えたものであって、人間そう簡単にいかない。ずっとネジだけ回してきた人が、いきなり介護の現場に行き、お年寄りのおしめを変えたりできない。やはり気持ちから変えていかなければいけないので、先進国の就労支援には時間がかかっているのである。そうした変わっていく力、自分で自分を変える力、自分で必要な知識・情報を集められる力という能力もこれからは大事になってくるのではないか。

[松岡苗羽小学校教頭] 挨拶

本校では今年5年生の子どもたちを対象としてわたなべなおさんに来ていただいて、演劇ワークショップを開催した。当初子どもたちは二十四の瞳を上映しようと言いながら、ぎこちない動きの日々が続いた。しかしワークショップをするにつれて、子どもたちが自分たちで演じるんだという意気込みに変わってきた。クラスの雰囲気や人間関係がよくなり、演劇というのは効果があるのだなと感じた。

本校でもアクティブラーニングに力を入れている。教員はできるだけ喋りすぎないようにということで、子どもたちに司会者役、タイムキーパー、板書係等を作って授業を進めている。国語、算数を中心に他の教科についてもやっているが、技能教科についてはまだやりにくいと感じている。先生のお話を聞いて、子どもたちのコミュニケーション能力を小学校の内から身に付けていかなければならないなと感じた。

[平田オリザ氏]

2009年に文科省のコミュニケーション教育推進会議の委員をしていたが、文科省でもコミュニケーション能力が主眼であるが、自尊感情も育つのではないかとされている。モデル授業をやってもらった学校は分かっていたかと思うが、拍手を受けたり、自分で考えたギャグを受けたりするだけで、普段学力が劣るとされていて、授業の中でも発言の機会がない様な子にとっては、とても自尊感情が育つと考えられる。今日は大学入試改革について先に話をしたが、小学校段階では授業を楽しくするツールとして使ってってもらいたい。

技術的な解説になるが、諸外国でも中学校以上は演劇の授業はプロの先生がやっている。日本の高校の選択必修の授業は大体音楽、美術、書道であるが、多くの先進国は選択必修の授業に音楽、美術、演劇があるので、高校に演劇の先生がいる。中学生以上になると専門性が高くなっていくので、本来は演劇の先生がやった方がいいが、日本には演劇の先生はほとんどいないので、なかなか難しい。初等教育段階では各先生方に勉強していただいて、これから少しずつ授業に取り入れられるようにしていただきたい。そこら辺を切り分けて教育委員会で検討していただきたいと思う。

現状を申し上げますと、日本の高校で演劇・ダンスが習えるコースを持っている学校は、

3年前で50校であり、今は増えて80校ぐらいである。そのうち6割が東京と神奈川に集中しており、大阪、兵庫を加えると8割である。教える人材がいなければコースを開設しようとしてもできない。神奈川県の新しい総合高等学校を見ても、ほとんどがパフォーマンスを習える授業を持っている。相模原工業高校という以前ラグビーなどで全国大会出るような高校が、工業高校型の総合高校に変わるときに、これからは想像力やデザイン力が大切であるということで、ヒップホップの授業を取り入れている。教員の問題をとっても、これを放っておくとどんどん都会が有利になってきてしまうと考えられる。

小豆島町は四国学院大学と包括的な協定を結んでいただいたので、四国学院大学には日替わりメニューで東京から一流のアーティストが来ているので、それをぜひ使っていてほしい。都会の子どもに負けないように表現力やコミュニケーション能力を身に付けていただきたいと思う。

[慈氏草壁保育園園長] 挨拶

保育園で日々取り組んでいることということ、メインは自由遊びということになってくる。自由遊びの中には砂遊びだったり、協働作業でレゴで何かを作れというようなものをしていて、まさに草壁保育園では昔からアクティブラーニングをしていたのではないかと感じた。その中でもコミュニケーション能力、発言力のある、自分の意見を言える子どもたちもいる。それが今後、小学校、中学校、高校、大学の教育の中で、短期的な記憶力を問う試験があると、どれだけ集中して覚えられるか、取り組むことができるか、ということがメインになってくると思われる。その中で日本はどんな方向に向かっていくのか。

先日リフレッシュ休暇を取ってロサンゼルスに行った。以前も6年間ほどロサンゼルスに滞在していたが、その際に各地域の高校ではキャリア教育がされており、ヒスパニックの人たちや、黒人の多い地域では、どちらかという自動車や建築といった授業をして、高校を卒業すれば整備士や建築士のライセンスがもらえるというようになっていた。先ほど先生が、同じ職業では一生生きていけないとおっしゃっていたが、ロサンゼルスではそういった人たちが多く成功している現状もあるが、どうお考えか。

[平田オリザ氏]

非常に難しい問題ではあるが、現在の日本は心理学用語でいうところのダブルバインドの状態になっている。ダブルバインドとは分かりやすく例えると、お母さんが子供を連れて散歩に出かけた先で近所の人に出会ったとき、「うちの子は勉強ができないけど、まあ子どもは体だけ元気なら良い」などと言い、家に帰ると「この成績は何」と叱りつける。大人であれば内と外の使い分けというのはあるが、子どもにはその区別がつかない。これが厳しく繰り返されると、心理学用語で自己喪失感、操られ感というように、アイデンティティを喪失してしまう。

今は日本全体がこのダブルバインドの状態である。国際化していくのか、日本文化を守るのか、ということである。極東の小さな島国が国際社会でどうにか生き残ろうと考えたら、これは仕方のないことだと思っている。私たちは日本語や日本文化を今すぐ捨てられないし、捨てるのはとてももったいない、捨てるには忍びないほどの素晴らしい文化を私たちは持っている。一方で鎖国をすると4000万人ほどしかこの国では住むことができないため、鎖国もできない。

四国、あるいは小豆島というのは日本の縮図であると思っている。小豆島が鎖国できるのであれば、今言ってきたようなことは忘れてもらって結構で、のんびり楽しく暮らしていけばいいが、そうはできない。特に小豆島の場合、半分の子どもたちが一旦は島外に出るが、教育関係者ごとに、「この子どもたちはいい子だが、外に出ると苦労する」と言われている。子どもたちには、演じ分けられる能力、つまり友達と話すときと、家族と話すときと、社会に出たときと、学校で話すときと、ちゃんと演じ分けられる能力が必要なのではないかと考える。

どういう社会を作っていきたいのかということだが、アメリカはまだ人口が増えてきている社会である。日本はこれからそちらの成長する社会を目指すのか、それとも先ほどデンマークの例を挙げたが、完全に成長はせず、小さな人数でどうにかして社会を回していくような社会を目指すのか、それははっきりとさせておかなければならない。今日本政府全体としては、まだもう一度成長させる方向で頑張っている。それが良いかの議論は置いておくと、自治体レベルで考えれば人口増加はもうないわけである。どうにかして人口減少を止めて少ない人数でこれをしていくためには、一人が複数のポジションをこなせないと、小さな島や自治体は運営できない。よく私たちはリーダーシップよりフォロワーシップ、という風に言っているが、リーダーに何かあった時にはフォロワーが取って代われるような人材をたくさん作っていくことが大事であると考えます。

また、そうやってどうにか活力を保っている間に、外国の方がどのくらいの割合で入ってくるのかということ、30年後40年後に必ず地域の課題になってくると考える。人道的に移民を入れろというわけではなく、必ずそうなるということ。1ドルが300円400円というように円安になれば入ってこないとは思いますが、今の為替水準かこのまま円高になれば移民は増えると考えられる。

日本は今まで、移民を入れるか入れないか、人道主義か純血主義か、という議論を避けてきた。だがヨーロッパのどの国を見ても、例えばフランスの大統領選挙であっても、左派でも絶対入れろと言っているわけではないし、保守派でも絶対入れろと言っているわけではない。どのくらいの範囲で入れるかということが選挙の争点となっている。

実際問題としては、外国人をどのくらい入れるか、そしてなるべく小豆島にとって役に立つ人を入れることが重要である。今の日本が急に何十パーセントが外国人になると当然混乱が起こるが、将来的には少しずつでも受け入れていかなければならないし、入ってくるのが必然であるので、今から準備をしていかなければならない。ヨーロッパではアラブの春などが起こると、数日後にはボートに乗って難民がやってくる。日本は東シナ海という荒い海と日本海という二つの障壁に守られた国であるので、明日難民が入ってくるというわけではない。この天の恵みを活かし、あと20年30年かけてゆっくりと時間をかけて国際化していくというのが落としどころであると考えます。

決してアクティブラーニングにしるグローバルコミュニケーション能力にしる、文科省に言われてするものではない。10年20年30年かけて、どういった小豆島を創りたいのか、その時にどんな人材が必要なのか、どのくらいの人数にこの島に残ってもらいたいのか、どのくらいの人から入ってきてもらいたいのか、外国から入ってきてもらいたいのか、そういったことから逆算して、今度は一人一人の子どもを見る。無口な子、大人しい子、活発な子それぞれを見ていかなければならない。その両方から見るのが、これからの教育に必要なものではないだろうか。

現在兵庫県の豊岡市で教育の手伝いをしているが、豊岡市は来年度から完全に小中連携となる。この9年間で4年、3年、2年と分け、コミュニケーション能力に関しては最初の小学校1年生から4年生の4年間は、基本的な喋れる、自分の意見が言える、人の意見が聞けるといった個々の力。小学校5年生から中学校1年生の3年間は、人と一緒に何か作り出す、タイムキープができるといった協働性。中学校2年生3年生の2年間では、誰に伝えたいのか、どうすれば伝わるのかといったことを考える。少子化の現在、そうした発達段階に応じたきめ細やかな枠組みを作ることが、今後必要であると考えている。

日本の今後の方向性であるが、文科省も一枚岩ではない。財界の人ほとにかく英語教育、グローバル教育というが、今の日本のグローバル教育というものは、一人のユニクロのシンガポール支店長を育てるために、後の39人を犠牲にするような教育と言っている。こうした教育は効率が悪いが、理屈はあっている。しかし国全体でこの方向に持っていくというのはもはや無理であって、生徒の能力をきちんと見て、個々の能力に応じたコミュニケーションを身に付けていく必要がある。

[岡本委員] 挨拶

今までの入試制度を潜り抜けてきた子どもたちと、これからの学力に加えてコミュニケーション能力も要求される子ども、両方が社会に出てくる。その時、これからのコミュニケーション教育を受けた子どもの方が、後々の成長が早いのではないかと感じる。こうした子どもたちが大人になった時の社会について、どう思うか。

[平田オリザ氏]

徐々にしか変化はないと考えるので、大きな断層ができるとは思えない。しかし先ほど言った就労支援など、社会教育的なものはこれから増えてくるかと思う。そのため早めに改革に取り組んだ地方自治体の方が有利かと思われる。

[岡田委員] 挨拶

最近の子どもを見ていると、少子化のせいかわ親が過保護になっているからか、子どもに自主性がない。子ども会の行事を見ていると、以前なら子ども主体で、近くの自治会館などで自分たちで考えて食事を作って遊びも考えていたが、今は子ども会自体が活発に動いていないと感じる。どこかに行くとすれば親が高松などに連れて行き、一日そこで遊ばせ、食事もそこでとって帰る、というようになってきている。そうすると、受け身的な子どもが増えてきているのではないかという危惧がある。それはこれからの小学校、中学校、高校での教育で徐々に能力がついてくるのかとは思っている。

社会福祉協議会の研修会に行くと、どこでもワークショップの時間がある。6、7人のグループに分かれ、出された課題についてみんなでそれを考えていく。そこでは時間が限られており、必ず役割も決めることになっている。議長、書記、発表役それぞれが、そこで話し合ったことをどうすればみんなに伝わるのか、ということを考えて取り組んでいる。こうした指導をずっと受けてきた子どもたちが社会人になった時に、ワークショップが役立つのではないか。私たちも試行錯誤で勉強中であるので、ワークショップのようにそれぞれ役割を持って学んでいきたい。

[平田オリザ氏]

コミュニケーション能力というのは、半分は自然な状態で身に付けられた能力である。昔の駄菓子屋さんは、駄菓子屋さんのおばちゃんと仲良くなるとあたりを何度も引かせてくれたりと、コミュニケーション能力が高い子の方が得する仕組みになっていた。しかし今の子どもはコンビニでコミュニケーション無しで買い物ができる。要するに子どものコミュニケーション能力が下がってきているわけではない。言語学者や社会学者に聞くとむしろ上がっているくらいだと言われている。

原因として2つポイントがある。一つ目はグローバル化によって、社会が求めるコミュニケーション能力が非常に高まっていること。もう一つは子どもの育つ環境が、コミュニケーション能力が要らないものになっていること。おっしゃられたように一人っ子だとお母さんが全部やってあげてきている。近所付き合いもない、友達付き合いもない。小豆島は自然が残っているというが、通学にスクールバスを使うなど、通学路は子どもが社会と接点を持つ重要なものであるのに、それがなくなってしまう。そして少子化のため、近所の友達のところに行こうとすると子どもは大人に連れて行ってもらうしかなく、大人と一緒にないと行動できないということになっている。

今まで幻想として、地方の子どもたちはのびのびと自然の中で育っていい子たちだと思っていたが、地方の方が車社会と少子化が掛け合わさり、地方にあった遊びが地方ほどなくなってきている。まだ東京の方が路地裏があつたりする、というような現象が起きている。全員でなくとも、一定数の全くコミュニケーション能力を必要としない環境で育った子どもが出てきている。これは学校教育で補っていかねばならない時代になってきている。

小豆島の農村歌舞伎はまさに、コミュニケーションを学ぶ場だったと思う。小豆島というのは江戸時代に瀬戸内海航路の中心地であったため、商人たちと付き合うために、当時の商人たちが使っていた浄瑠璃の言葉を勉強してコミュニケーションをとっていた。小豆島や淡路島で歌舞伎や人形浄瑠璃が発達したのは、商人たちとコミュニケーションをとるためである。そういったシステムは、かつての共同体の中には意識せずとも持っていたが、今は全て無くなってしまった。もう一度、子どもたちが遊びの中でコミュニケーション能力が少しずつ育つようなプログラムを入れていかねばならない。

[熊坂委員] 挨拶

いわゆるガキ大将という存在がいたのは私たちの世代が最後かと思われるが、異年齢の小学生と中学生が集団で遊ぶということは大事なことであると考えます。今の子どもたちを見ていると、同年齢の子どもとしか遊ばないために、周囲とのつながりが薄くなっている気がする。集団の中で上級生の様子を見ながら自分がどうしたらいいのかと考え、また集団の中での自分の位置が1年ずつ変わっていく、という経験をできる状況が失われてしまった。

また学校教育の中で10年ごとに教育課程が改定されており、そのスパンの中で5年経てば次の新しい教育課程について検討がされている。そうすると今までの教育課程がどのような成果を出したのか、という検証ができないままに、新しいものになってしまう。その中で学校教育をやっていくなれば、本当にやらなければならない教育とは何か、教員の先生方も分からなくなってしまうのではないだろうか。5年経てば新しい教育課程の指

導を行わなければならないし、世の中はもっと速いスピードで変化していき、それについて行かなければならない。学校教育、そして先生方は何をよりどころとして教育を行っていけばいいのか、本質が見えにくいのではないか。

その中でも読み、書き、聞き、話す、という基本的なところは変わらない。そういう変化するものと、しないもの、不易と流行を見極められることが必要ではないだろうか。技術的には新しいものになっているが、それをどうとらえるか。10年経てば以前のものが駄目、というわけではない。変わらないものと変わる世の中の同居のバランスをどう取っていくかには、絶えずジレンマがあるため、迷いながら進めていくしかないのではないか。

[後藤教育長]

目の前に大学入試改革が迫っていることはゆるぎない事実である。「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意ですか」という問いに対してはいと答えた割合が、香川県は全国に比べてかなり低くなっている。「友達の意見や話を最後まで聞くことができますか」という問いでも同じである。こうした子どもたちの実態は直さなければならないし、そのためには小学校から変えていき、コミュニケーション能力を高めなければならない。苗羽小学校が行っているようにわたなべなおさんの演劇、ワークショップを他の小学校でも実施してもらい、それを突破口としてアクティブラーニングにつなげていってもらいたい。

[平田オリザ氏]

今名前が挙がったわたなべなおさんは、東京のコミュニケーション教育でもトップの女性であるから、ぜひ活用してもらいたい。その際に必ず他の先生方の授業を見てもらったり、必要があれば先生方を対象としたワークショップや研修会で、最終的には先生方が授業を面白くしていく力をつけていただくのが目標だと思う。とりあえずの導入の滑り出しはしたので、ここから先どう広げていくかということをご検討いただきたい。できるだけ協力はしていきたいと思っている。

[塩田町長]

今回は、4月中旬を予定している。

今日はありがとうございました。